

分断された〈場〉をみつめるまなざし、 そのまなざしが見つめたものに応答すること

尹慧瑛『暴力と和解のあいだ 北アイルランド紛争を生きる人びと』法政大学出版局、2007年

宋 安鍾

目次

- はじめに
- 北アイルランド問題の歴史的起源から、北東アジア諸地域の関係史を問い直す
- あえて「在日朝鮮人」運動右派との比較を試みる
 - 韓国民団の創設者たち
 - 「コリア系日本人」化の推進者たち
- むすびにかえて
— “Como dos extraños (「見知らぬ者同士のように」)”

1. はじめに

尹慧瑛は自著のなかで、北アイルランドが、「イギリスによるアイルランド植民地支配の結果が凝縮された〈場〉」、「三〇年以上にわたる紛争によって社会が著しく分断された〈場〉」、であり、「暴力と分断の克服が課題となってきた一方で、歴史と記憶をめぐる対立や相互不信」が、「和解」の「困難さをことあるごとに示してきた」、と指摘する¹。

声高に語られないからこそ、この「ユリシエズの瞳」(テオ・アンゲロプロス)を育んだ、もうひとつの〈場〉が立ち現れてくるようだ。そ

れは北アイルランドのように、領有と所有で画された空間ではないが、植民地支配の結果がいまなお凝縮された〈場〉であるし、50年以上にわたる紛争によって著しく分断された〈場〉でもある。こうした〈場〉で生きざるをえない当事者たちが、「歴史と記憶」をめぐる対立や相互不信による、「和解」の困難さに直面していることも同様である。そして私／たちが、たまさか生きるこの土地には、こうした「はざま」であり「あわい」である〈場〉が複数存在し、明滅するように見え隠れしていることにも気づかされる。

しかし、領有と所有で画された空間ではない以上、北アイルランドのユニオニスト(以下、ユニオニスト)のように、「抵抗するマジョリティ」として声高に、「北アイルランドが連合王国にとどまる」ことを主張し、「アイルランド統一に断固として反対」するような政治勢力²が、それとしてわかるかたちで存在するわけではない。但し、尹のまなざしが、彼女が偶然そこにいる、もうひとつの〈場〉にも向けられているのなら、彼女が自著で表象・分析したユニオニストを分

¹ 尹慧瑛『暴力と和解のあいだ 北アイルランド紛争を生きる人びと』法政大学出版局、2007年、3頁。

² 同上、2頁。

析概念として流用し、この〈場〉を生きざるをえなかった人びとが紡ぎ出した諸言説を、時間軸を遡及しながら洗い直してみるのが、読み手の側からのなんらかの応答になるかもしれない。

本稿では、尹と同様の〈場〉を生きざるをえない当事者として、そのような応答を試みたいと考える。本来の意味での書評ではもとよりなく、比較史的見地からすればそもそも破綻しているのだが、歴史に仮定を持ち込み、ありえた複数の歴史過程を想像しつつ、(批評的に) あえてする牽強付会な「読み」が切り拓く、対話も含めた(不)可能性を模索するひとつの試み、とでも(居直りの)位置づけたいと考える。あらかじめ、読者諸賢の諒恕を乞う次第である。

2. 北アイルランド問題の歴史的起源から、北東アジア諸地域の関係史を問い直す

尹の叙述から、北アイルランド問題の歴史的起源に関する箇所を引用してみよう。

一五四一年にヘンリ八世がアイルランド国王の称号をあわせもつことになってから、イギリス絶対王政による植民地支配が本格化した。なかでも、ユニオニズムおよび北アイルランド問題を考えるにあたって重要なのは、一七世紀のアルスター植民である³。

このブリテン・アイルランド両島と、私／た

ちが現時点を生きる「北東アジア」と総称される諸地域の関係史を比較した場合、近代国民国家成立以前の、近世絶対王政による直轄王領拡大の一環としての植民活動が、近現代の植民地主義と歴史的連続性を持つか否か、が彼我の差であるかのような。

しかし、16世紀中葉の、イギリス絶対王政によるアイルランド植民地支配の本格化や、17世紀のアルスター植民と同時期に、北東アジア諸地域の関係史が、やがて明清交替＝「華夷変態」にまで至る、一大変動期を迎えていたことに気づかざるをえない。

ヘンリ八世がアイルランド国王を兼任した約50年後、豊臣秀吉の絶対主義的統一権力は、明朝華夷秩序に挑戦して「唐入り」を呼号し、橋頭堡であった朝鮮半島への侵略戦争を遂行した。いわゆる、文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱、1592・97年)である。

倭乱は朝鮮に深刻な後遺症をもたらした。

人的被害は甚大で、農地も三分の一に激減、農村は荒廃し、倭乱中にも困窮した人々を巻き込んだ^{イ・ミョク}李夢鶴の乱が起きた。奴婢の名簿が焼かれたほか、量案(土地台帳)や戸籍も多くが失われ、租税の徴収や徭役の徴発に支障をきたした。(中略)文化財の被害も大きく、景福宮をはじめとする宮殿や各地の建築物が焼失し、書物、美術品なども略奪された。(中略)日本は戦争中朝鮮から多くの人々を連行

³ 尹前出、62頁。

し、文化財を略奪した。捕虜には有田焼を始めた李參平^{イサンビョン}のような陶工がおり、萩、薩摩など西日本の陶磁器産業はこのときに起こったが、朝鮮では陶工不足から生産が危機に瀕した。このほか、薩摩には養蜂技術が伝わり、また官僚姜沆^{カンハク}は藤原惺窩に朱子学を伝授した。さらに数万の人々が奴隷として東南アジア方面に売られ、なかにはヨーロッパにいたりルーベンスの絵に登場する者もいる。略奪した書物には李滉の著作を含め朱子学関係のものも多く、中国から輸入された書物とともに、江戸時代の朱子学の確立に大きな役割をはたし、また活字やその技術は、江戸初期の慶長古活字版を生んだ。このころ、日本経由で新大陸原産の唐辛子が朝鮮にはいったといわれ、また、日本の茶道における茶室の形式や茶器には朝鮮の影響がみられる⁴。

侵略戦争は結果として失敗に終わり、「天下人」秀吉が「朝鮮王」を兼任する、あるいは、然るべき人物を冊封することもなく、日本軍は日本式城郭（倭城）を築いて数年間駐屯した慶尚道沿岸一帯を割譲させることもできなかった。もしこの侵略戦争が成功し、朝鮮半島が日本の近世統一権力に領有され、対馬・壱岐・九州一円の農民が入植していたなら、そして朝鮮王朝の遺臣・遺民による義兵活動（抗日レジスタン

ス）が以後も持続し、復辟／独立運動へと発展したのなら、（そして、入植地でユニオニスト／ナショナリスト的存在が生成したのなら）、両地域に比較可能性が生じたかもしれない。

このような仮定はナンセンスにしても、ブリテン・アイルランド両島の関係史との相違が、北東アジア地域には西欧国家体系と原理を異にする国際体系であった華夷秩序が存在し、宗主国明が朝貢国朝鮮を軍事支援した点にあることは、押さえておく必要があるだろう。また侵略戦争が失敗に終わったとしても、侵略軍による人的・物的略奪が、やがて近代を迎える両地域に及ぼした持続的影響は、やはり踏まえておく必要があるのではないか。

例えば、朝鮮半島で生産が危機に瀕するほどの陶工の「強制連行」の結果、日本列島では「萩、薩摩など西日本の陶磁器産業」が勃興したわけだが、これは秀吉の朝鮮侵略戦争の主力で、ともに関ヶ原の合戦の「負け組」であった長州藩と薩摩藩のできごとに他ならない。そして両藩は、幕末期に西南雄藩として倒幕勢力の主力となり、倒幕後樹立した明治政府では薩長藩閥勢力として、片や「北進論（朝鮮―「満洲」―モンゴル）」、片や「南進論（琉球―台湾―「南洋」）」といった、近現代の日本植民地主義を推進していく。西南雄藩の軍事力の基盤となった産業力・経済力の一端が、かつての侵略戦争で連行してきた人材による技術革新と輸入代替にも起因することはなかっただろうか。一方、18

⁴ 武田幸男編著『新版世界各国史2 朝鮮史』山川出版社、2000年、194～195頁。引用に際して、朝鮮姓名以外のルビを省略。

世紀の英正時代(国王英祖・正祖の統治時代、1724～1800年)のような中興期はあったものの、その後の朝鮮王朝の国力は漸次衰退を深め、近世日本の茶や繭糸のような、開国以後貿易と輸出を通じて外貨を稼ぎ出す産業にも恵まれないまま西力東漸の時代を迎え、かつての侵略戦争の記憶にも淵源する、朝鮮蔑視意識にまみれた薩長藩閥政府の尊大な開国要求にさらされることになる。

さて、「武威」、つまり剥き出しの軍勢力を行使して、明朝華夷秩序にとって代わろうとした秀吉の企ては烏有に帰したが、日本近世の絶対主義的統一権力による、自己に適合的な対外秩序を構築する試みがすべて失敗に終わったわけではなかった。この過程で、琉球・アイヌの従属化には「成功」したからである。

豊臣政権が、島津氏・蠣崎氏を媒介として着手した琉球・アイヌ支配は、徳川政権のもと、1630年代、つまりは17世紀初頭に達成された。

①島津家久の琉球制圧、及び尚寧王の家康・秀忠への服従(1609・10年)と琉球の幕藩制的軍役・知行体系への編入(1634年)⁵、②幕府巡検使に対するアイヌの「ウイマム(御目見得)」創始(1633年)⁶、がそれである。ロナルド・トビは、これら徳川将軍による17世紀初頭の国家構築と支配の正統性確立のための外交を、オ

リヴァー・クロムウェルのそれと比較している⁷。

北東アジア地域の関係史を遡及して考えると、ブリテン・アイルランド両島の関係史により近似しているのは、朝鮮半島以上に、幕藩制国家のなかの「異国」・「異域」という位置づけを与えられ、それが近現代日本の植民地主義の展開へと直接接続してゆくかのような、奄美・琉球やアイヌ(モシリ)ではないだろうか。北アイルランドのように、先住民と入植者が主張する権原(title)が相剋する事例という点でも、比較可能性があるように思われる。例えば、トビも指摘しているように、薩摩藩による琉球統治を、京都帝大の植民学者山本美越乃が「誤れる植民政策の畸形児」と評価したことがある⁸。また、戦前期沖縄を代表するジャーナリストで、『琉球新報』主筆であった太田朝敷の論説「憐なる琉球人」(1906年)には、以下のような指摘がある。

畢竟は鹿児島商人の或る者は我が琉球の山川悉く其殖民地と心得て居るのである而して此の愛々たる琉球土著人民を以て其の奴隷の如く視なして居る丁度昔時の欧羅巴人種が亜米利加の印甸人に対するが如くまた彼の未開野蛮の阿弗利加土人に対するが如く然るものがあるのである⁹。

⁵ ロナルド・トビ／速水他訳『近世日本の国家形成と外交』創文社、1990年、45～46頁。

⁶ 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988年、10～11頁。

⁷ トビ前出、52・93頁。

⁸ 同上、49頁。山本美越乃「誤れる植民政策の畸形児 琉球の廃藩と日支阿蘭関係の終末」『経済論叢』25-3号、1927年。

⁹ 太田朝敷「憐なる琉球人」『琉球新報』1906年8月1日付。千

太田の『沖縄県政五十年』によると、1884～85年頃から沖縄県の役人としてやって来る鹿児島県人が年々増加し、特に「警察の如きは殆ど鹿児島県人が占領するという勢い」であり、商人もまた「どしどし入り込んで来て」、1889年頃、「居留商人といえは社会的にも頗る権威ある団体であつたが、その寄留商人とは鹿児島商人の別名であつた」¹⁰。

近代以降、琉球・沖縄人やアイヌの自律性を抑圧しながら日本（「内地」）への統合を推進した、「辺境」を生きたヤマトンチュウ／和人入植者の事例のひとつがここにある。例えば、これら鹿児島県人でもある寄留商人の「内地人」意識、つまり、“Japaneseness”を、ユニオニストの“Britishness”との比較において問うことは可能であろうか？ またそれは、特に台湾領有（1895年）以降、日本「公式帝国」の版図となった各植民地に入植した帝国宗主国民としての「内地人」意識（“Japaneseness”）とはどう絡み合っているのだろうか？

さしあたりここでは、尹のモノグラフに触発された一読者としての、ひとつの自問にとどめたい。ブリテン・アイルランド両島の関係史ほどクリアでないにせよ、あるいは、だからこそ、

近世の北東アジア諸地域の関係史の推移と、現代の植民地主義の断絶と連続を、現在この地を生きる私／たちの実践的な問題意識から、あえて問い直し、みつめ直す必要があるのかもしれない。

3. あえて「在日朝鮮人」運動右派との比較を試みる

1) 韓国民団の創設者たち

尹は自著のなかで、ユニオニストにとっての「包囲の心理」における不安と恐怖は、①変化に対する非妥協的な態度や猜疑心、②ブリテンとの連合への固執やブリティッシュネスの主張、③マジョリティとしての認識の弱さ、④王や連合王国といった制度・機構に対する忠誠とイギリス政府やイングランド中心主義の政策に対する反抗が交錯する、アンビヴァレントな忠誠、として現れる、と指摘している¹¹。

「ユニオニスト」を「戦前以来の日本の反共保守・極右勢力」、「ブリテンとの連合」を「日米同盟」と置換してみるだけでも、いろいろと示唆に富む話である。

「日本は台湾と韓国が共産主義者に征服されるのを防ぐため、できる限りあらゆることをする用意をしなければならない」（岸信介、1958年）、「韓国および台湾をふくめた“日本合衆国”ができるまでは極東に安全はあり得ない」（大野伴睦、59年）、「韓国における南北統一運動は、日本に対する間接、直接侵略の脅威の増大であ

本秀樹「人類館事件と差別の序列 第五回内国勲業博覧会における人間展示」『季刊現代の理論』8号、2008年、63頁、からの再引用。

¹⁰ 太田朝敷『沖縄県政五十年』、比屋根照夫・伊佐真一編『太田朝敷選集』上巻、第一書房、1993年、129頁。川畑恵『沖縄創県から初期県政へ』、桑原真人・我部政男編『幕末維新論集9 蝦夷地と琉球』吉川弘文館、2001年、313頁、からの再引用。

¹¹ 尹前出、93～96頁。

る。韓国における反日運動も日本を脅かす活動である」(杉田一次、防衛庁陸幕長、61年)、「台湾と韓国を抱えて共産主義と対抗するだけのものがなければ、日本の存在はない」(吉田茂、62年)、「釜山まで赤旗が来たならそりゃ困るな」(田中角栄、64年)、「韓国はなんといっても、日本の外堀の立場にある」(福田赳夫、64年)……などなど¹²。

これらのことばは、「日本の反共保守・極右勢力」における「包囲の心理」の位相とそのあらわれ方、それが旧植民地である朝鮮半島にどう投影され、戦前期の植民地主義と縫合された言動になるのかを分析する上で、きわめて有効であると思われる。但し、「自製の領分を、ゆめゆめお為めごかしに侵してはならない」(金時鐘^{キムンジョン})のだから、あえて言及はここまでとしたい。

先述したように、本稿の課題設定は、尹と同様の〈場〉を生きざるをえない一当事者として、この〈場〉を生きざるをえなかった人びとが紡ぎ出した諸言説を、時間軸を遡及しながら洗い直してみることであった。であれば筆者は、「日本の反共保守・極右勢力」と「包囲の心理」を分かち合った「在日朝鮮人」運動右派にこそ、より注目すべきであろう。具体的な担い手を挙げれば、権逸^{クワンイル}(1912~2001年)、曹寧柱^{チョニンジュ}(1913~96年)、鄭建永^{チョンゴンヨン}(1923~2002年)らである。

彼らは、「解放(1945年)」以後の在日朝鮮人

運動において、左派の在日本朝鮮人連盟(朝連)(45年10月結成)と対抗しつつ、対日協力者(いわゆる「^{チニルバ}親日派」)・民族主義者を結集した右派陣営で指導的役割を果たし、翌年10月に在日本朝鮮居留民団(現、民団)を結成した。

権は、旧「満洲国」間島省延吉地方法院審判官(判事)、弁護士、在日本大韓民国居留民団中央本部団長(63~67年)、67年以降、朴政権(第三共和制)の与党共和党、朴「維新体制(第四共和制)」下の維新政友会の国会議員を歴任した¹³。

権と同郷出身、京都帝大を中退して立命館大学を卒業した曹は、民団結成に際して「かげの総参謀格」をつとめ、以後、民団企画室長(49年)、韓国駐日代表部諮問委員会政治部常任委員(50年)、大韓青年団長(同)、民団団長(60~61、76~79年)を歴任した¹⁴。

鄭の通名(帰化名)は町井久之、愚連隊「町井一家」(のちの東声会)の領袖であり、占領軍GII(参謀第二部)謀報部に起用され、朝鮮戦争勃発前の50年6月、ジョン・フォスター・ダレスの一派が率いる韓国非武装地帯の視察旅行に、児玉誉士夫とともに同行した¹⁵。韓国ロビーの一員として釜関フェリー便を就航させ(70

¹³ 権逸『権逸回顧録』権逸回顧録刊行委員会発行/育英出版社制作、1987年。

http://www.mindan.org/shinbun/010411/topic/topic_b.htm (「民団新聞」トピック)

¹⁴ 松田利彦「1998」「曹寧柱と京都における東亜連盟運動——東亜連盟運動と朝鮮・朝鮮人(2・完)——」『世界人権問題研究センター研究紀要』第3号、1998年、56頁。

¹⁵ ロバート・ホワイティング/松井みどり訳『東京アンダーワールド』角川文庫、2002年、110~111頁。

¹² 「日韓関係を記録する会」編『資料・日韓関係Ⅰ 政治・経済・拷問の実態』現代史出版会、1976年、35~39頁。

年)、民団中央本部顧問にも就任した(71年)。
大統領朴正熙^{パクチョンシ}の信任厚く、KCIAとも緊密で、
73年の金大中^{キムデジュン}拉致事件にも関与したとされる¹⁶。
専修大学中退の学歴に照らせば、鄭もまた権・曹同様に植民地エリートであったのだし、愚連隊「町井一家」は、GIIや児玉の庇護のもとで勢力を伸ばした点で、戦後混乱期の愚連隊や暴力団以上に、「朝鮮民族青年団(族青)」など韓国の反共青年団に相似していることは、指摘しておく必要があるだろう。

同郷出身の盟友であった権・曹、その薫陶のもと「在日朝鮮人」左派に対する白色テロを実践した鄭らが¹⁷、石原莞爾が提唱・推進した東亜聯盟運動のシンパタイザーだったことにこそ注目したい。戦時中朝鮮人徴用工を指導した曹らの標語は、「東亜の大同」・「民族協和」・「東亜の保全」であり、その終局的理想は、天皇を盟主とした「東亜聯盟」のもとでの、日本人と朝鮮人の一体化・平等化の実現であった。

1949年8月の石原死去に際して告別式長をつとめた曹は会衆の前で、「日本人のすべてが天皇陛下にそむいてもわれわれ朝鮮青年同盟(46年11月に結成された「朝鮮建国促進青年同盟(建青)」、民団の前身のひとつ、引用註)は日本天皇を護持します」、と述べた¹⁸。

のちに彼らが、旧「満洲国」関係者である岸

信介と朴正熙の「合作」とでも形容すべき韓日基本条約成立(1965年)にひと役買い、日韓台「反共アジア連合」の一環としての「日韓共存共栄」を推進する思想的必然性は、ここにもあったのではなかったか。

彼ら「在日朝鮮人」右派が、天皇を盟主と仰ぎ、旧帝国日本の版図を「反共アジア連合」として蘇生させようとする姿勢は、「戦後在野アジア主義」の一潮流とも評価可能であるし、分断固定化に反対し、民主化要求を掲げる韓国在野の抵抗民族主義運動を「容共勢力」とみなして敵対し、戦後日本の政界で「保守本流」と呼ばれた政治勢力の、「一国平和主義」的な外交思潮・政策への「反抗」を含意するものでもあった。

その思想と行動に、ユニオニスト的なものを読み込む可能性は皆無であろうか? もちろん、彼らはユニオニストのように入植者の末裔ではない。また、北アイルランド問題は植民地主義の残滓であるが、尹のモノグラフを読む限り、冷戦的文脈には乏しい印象を受ける。

2) 「コリア系日本人」化の推進者たち

この点については、拙稿¹⁹で詳論したので、それに譲りたい。

同時期に刊行されたため、この拙稿で検討対象にできなかった文献として、『中央公論』2007

¹⁶ 「日韓関係を記録する会」編『資料・日韓関係Ⅱ 人脈・金脈・KCIAの実態』現代史出版会、1976年、241頁。

¹⁷ 権前出、558頁。

¹⁸ 松田前出、54～55頁。

¹⁹ 宋安鍾『「コリア系日本人」化プロジェクトの位相を探る』『現代思想』6月号、2007年。

年7月号に掲載された、韓昌祐^{ハンチャンウ}・坂中英徳対談「消滅目前の在日コリアン社会へ 日本国籍を取得し、政治参画の道を選べ」がある。

韓(1931～)は、パチンコ業界最大手の(株)マルハン代表取締役会長であり、02年に帰化した。民団関係者で韓日両国政府から叙勲された経歴に、権逸との共通点がある。曹が京都在住であったこと、韓がマルハンを起業したのもこの街であったことにも注目したい。韓が民団の創立者にして長老である、曹の薫陶に浴した可能性も否定できないからである。ちなみにこの対談後、マルハンのマカオのカジノ複合施設への資本進出が報道された²⁰。さてこの対談から、注目すべき発言を拾ってみよう。

パチンコ店のオーナー経営者の七、八割は在日コリアンですが、彼らが日本国籍を取得し、参政権を持てば大きな政治的影響力行使できるはずですが、彼らが本国籍に固執する現状では、現場の声が政治や行政に届く格率は非常に低い。しかし、三〇万票あれば、政治も行政も決して無視できない存在になります²¹。

未来のためには中国の蒋介石が言った『過去は忘れることはできないが、許すことはで

きる』という気持ちが大切です。日本政府はこれまで謝罪もしていますしね。過去のことをあれこれ言うより、差別する人の二倍も三倍も知性と教養を高めて差別を克服すべきです。そういう努力こそ肝要だと私は思います²²。

以前、ソウルの海外同胞スポーツ祭典が開かれたときには、在カナダのコリアンはカナダと韓国の両方の国旗を堂々と掲げていた。

『日本のコリアンもこうありたい』と思いました。日本でコリアンが日の丸を掲げたら同胞から撃たれかねないですけど。(笑)²³

韓国も経済力をつけて世界的にもAランクの国になった。それで『両国に奉仕する義務がある』と思い切ることができたのです。『日韓を隔てている玄界灘に本当の友好の橋を架けよう』とね²⁴。

韓 在日コリアンと日本人は共生できると思うのです。そしてそれを確実にするのが、民族名での日本国籍取得によるルーツの公表なのです。坂中 同感です。日本人と在日コリアンの間には、真の友情も信頼関係もあったのです。そういう深い関わりの歴史があったからこそ、二十一世紀の日本が多民族の国民統合を進めるために、コリア系日本人の

²⁰ <http://news.www.infoseek.co.jp/entertainment/story/20070731jcast200729842/> (「パチンコのマルハン マカオのカジノに参入」)

(J-CAST)『インフォシーク・楽天ニュース』2007年7月31日付

²¹ 韓/坂中前出、168頁。

²² 韓/坂中前出、169頁。

²³ 同上、169～170頁。

²⁴ 同上、171頁。

政治力を借りたいと思うのです。日本民族による日本民族のための政治では『多民族共生国家ニッポン』は創造できないからです²⁵。

元法務官僚（東京入管局長）坂中の「多民族共生国家日本」構想が、旧「満洲国」における民族協和主義を彷彿させるものであることは、既に拙稿で指摘した²⁶。北朝鮮の核放棄による朝鮮戦争終結が展望されもした昨今、北東アジア地域の政治情勢を度外視し、「在日朝鮮人」総員に「朝鮮半島から解放された自由な精神」を称揚する²⁷、坂中の言説の意図のありかは気掛かりである。周知のごとく、今年（2008年）、韓国左派政権は退場し、保守政権が返り咲くことになる。韓日両国の関係再編と連動しながら、坂中らの「運動」が勢いづく可能性は否めないし、彼らの言動を引き続き注視していく必要がある。

さて、「純血至上主義」幻想をもつ日本民族主義者に呼応して²⁸、「日本民族」と日本に永住する「朝鮮民族」の協和主義的「共生」を展望する「在日民族主義者」韓の言動に、嘗て曹寧柱が終局的理想とした、天皇を盟主とした「東亜聯盟」のもとでの、日本人と朝鮮人の一体化・平等化の実現の展開形態をみることができるのではないか。この場合の「東亜聯盟」とは、旧

「満洲国」を「国史」上唯一の先例とし、「多民族日本国民統合の象徴」としての天皇を戴く、日本の領域に折り畳まれた「大東亜共栄圏」でもある、ネオリベラルな「多民族共生国家ニッポン」になるだろう²⁹。

①日本人＝「日本民族」との歴史的な記憶・経験の共有、②日本国家における社会的・政治的制度との自己同一化・日本国民としてのアイデンティティ、③ネガティブで「有徴」の朝鮮／韓国（抵抗）民族主義的アイデンティティへの対抗として構成された、ポジティブで「無徴」のナショナル・アイデンティティの三側面を備えた、こうした“Korean-Japaneseness”を、ユニオニストにとっての“Britishness”と比較対照することは、はたして可能であるだろうか？³⁰

なおこれも拙稿で指摘したが、法務大臣の裁量による現行帰化制度の特例として、法務大臣への届出だけで日本国籍が取得できるようにする「国籍取得特例法案」の成立を、運動目標としてきた「コリア系日本人」化プロジェクトは、日本ナショナリズムと整合する「在日朝鮮人」版歴史修正主義運動を随伴していることも特徴である³¹。当事者にそのような歴史観を受けられるよう働きかけ、日本人と「在日朝鮮人」の歴史認識の齟齬の克服と統一、それを通じた「歴史認識問題」じたいの精算を企図しているのだから、それは彼らなりの「歴史和解」プロジェ

²⁵ 同上、173頁。

²⁶ 宋前出、237頁。

²⁷ 韓／坂中前出、168頁。

²⁸ 宋前出、233～235頁。

²⁹ 同上、237頁参照。

³⁰ 尹前出、103～105頁。

³¹ 宋前出、226～230頁。

クトでもあることに注目したい。

4. むすびにかえて——“*Como dos extraños*
（「見知らぬ者同士のように」）”

以上、尹と同様の〈場〉を生きざるをえない一当事者として、彼女が表象・分析したユニオニストを分析概念として流用しながら、この〈場〉を生きざるをえなかった人びとが紡ぎ出した諸言説の一端を、時間軸を遡及しながら洗い直してみた。それが、尹の分断された〈場〉を見つめるまなざし、そのまなざしが見つめたものに応答することになりえたのか、心許ない限りである。一読者として、理論分析・文献実証史・フィールドワークといった様々な手法を駆使しながら、なにより30年にもわたった暴力の応酬で深く傷つき、引き裂かれた人びとの声を聴き取ろうとする姿勢を崩すことなく、北アイルランドという対象を、精緻かつ堅実にトレースした優れた研究成果に接しえたことに、深く感謝したい。

1987年に始まった尹の北アイルランドへの旅は³²、これからも続くことだろう。優れた旅の書は、読み手の側が辿ってきた旅の遍歴、その旅にまつわる諸般の記憶をも想起させずにやまないのだろうか。尹のモノグラフを読み進めながら、この〈場〉以上に想起させられたのは、ゼミの学生たちと2002年2月に旅したカンボジアの光景であった。その〈場〉もまた、植民地支配の結果がいまなお凝縮された〈場〉、30年

以上にわたる紛争によって著しく分断された〈場〉、いまなお、「歴史と記憶」をめぐる対立や相互不信による、「和解」の困難さに直面している〈場〉であった。

プノンペン ツールスレン強制収容所跡地の入り口に佇む、地雷被害で四肢のいずれかを喪失した人びと、終生身体に刻まれた痛苦さえ、虐殺という痛ましい記憶の拭えない痕跡さえ、外貨の暴威を携えてきた、私／たちを含む鈍感で無神経な外国人観光客相手に、生き延びるため「観光資源」化して差し出さなければならぬ現実、なにをどうことばにしたところで甘い感傷にしかなりえないが、他者の記憶と「経験の収奪」に常日頃憤慨してきたみずからが³³、それに荷担している現実には打ち据えられていた。自分がなに者であるのかを、鋭く問われたようにも思う。プノンペンという「東南アジア」の一角から、隣接するタイ王国、嘗て北米合衆国が「反共の砦」として樹立した分断国家南ヴェトナム、それらがヴェトナム戦争遂行の軍事橋頭堡であったことを感知したとき、「北東アジア」諸地域の地政関係、そのなかの分断国家韓国と、象徴天皇を戴く「立憲民主国」日本が占める位置が、心象のなかでなまなましく立ち現れてきた。向き合うことをどこかで避け続けてきた、自分がこれからも生きざるをえない〈場〉

³² 尹前出、3頁。

³³ 「経験の収奪」は、2001年のタイへのスタディ・ツアーで出会った、チュラロンコン大学留学中の龍谷大学の学生（当時）との討議のなかで、彼から教わったことばであることを明記しておきたい。

に、立ち返らざるをえなかった。この旅が、「以北」出身者2世の韓国人マイノリティに導かれた同年9月の韓国への旅へと接続され³⁴、02・9・17とそれ以降の事態に臨む態度を固めてゆく契機となった。私の旅もやはり続くことだろう。

「ウーティス（誰デモナイ）」と名乗り、サイクロプスとの難局を「メティス（狡知）」で凌いだオデュッセウスのような旅人にはなりえない、愚昧者の旅の行く末は知る由もない。同様の〈場〉を生きざるをえない旅する者／たちは、旅の途上でたまさか出会い、「見知らぬ者同士のように（“Como dos extraños”）」別れゆき、ふたたびそれぞれの旅路を歩みゆくのであろうが、その〈場〉とそれを囲繞する空間、そして、そこで生きざるをえない人びとの、「歴史と記憶」をめぐる「和解」の（不）可能性に無関心でいられないことだけは、確かなようだ。

（ソン アンジョン／そう あんしょう・金沢大学）

³⁴ 「以北」出身者の韓国人マイノリティ＝失郷民（シリャンミン）については、李英美「うちなるコリアン・ディアスポラ——シリャンミン（失郷民）とイサンカソク（離散家族）にとつての越南・越北・拉北・脱北」『現代思想』35巻2号、2007年、140～153頁、同「シリャンミン、その望郷と帰郷——難民でない難民・移住民でない移住民として」『現代思想』35巻7号、2007年、144～156頁、参照。